

研究と修養

高 畠 寛 我

葛城山人慈雲尊者の語に曰く

一世、飯、衲子

千古無事人

天地攸々トメ在リ

我モ萬秋萬春ナリ

これは、わたくしの所持する尊者の十善法語の閑卷劈頭の賛であるが、この短かい五言詩のうち、尊者のゆたかな体験、天地と一体となられた境地をうかがうことができる、次に豪怒大僧正の序文が載せられてあるが、そのつゞきに尊者の人となる道の略語がある、曰く、

蒼々たる長天、物あり、理あり、流行して道となり、うけ得て命となる、雲巾き雨ほどこして岳物形をしく、羽ある者空中に翔り、蹄なる者林藪を走る、そのなか、人の靈たる、天地にまじはりて三才と称す、拡て是を充す、一艸一木も小天地なり、蠓飛蟻動も一天地なり、相視て逆うことなき、思禽獸に及び、徳艸木に被る、古に覆して無病長寿のたのしみを樂しむ、此によるなり（不殺生の相）

又曰く、

屋舎その制度を通る、かならず櫛を括く、衣服の分、刀劔の飾、車馬の装、みな準じ知るべし、智勇世を掩ふ、容に衆貌異なる、名稱の廣く達する、才芸の他に超る等その慎を忘るべからず、其徳ありてその位に在る、其功有りて其祿をはむ、讓をうけて其家の主たる、幸に遇ふて其財にとむ、もし傲る心あれば是もなきにしかず、（不貪欲の相）

又曰く、

此人の此世に在る、業は報をしらず、報は業をしらず、此しらざる處に道存して滞らず塞らず、此中衆あり間斷なく缺失なし、謬れは憂ふ道こゝに没す、迷へば瞋る、衆愛に失ふ、没せず失せず、浩然として天地の間に俯仰す、（不瞋恚の相）

又曰く、

物外の理なく、理外の物なし、理をそなへて物位に居す、一々塵中に法界を見る、物に託してその理全ければ諸佛の内證智は今日凡愚の起行に遠からず、それ唯孝か、孝は萬行の本なり、経に云く、父母師僧三宝に孝順せよ、孝順は至道の法なりと（不邪見戒の相より詰む）慈雲尊者の著述に人となる道と人となる道略語の二種あるうち、以上はその略語のうちより二三を引用したのである。

凡そ大道ありて天地あり、天地ありて人あり、この人の人たる道は十善にあり、この道は佛出世したまうも、出世したまわざるも、常に世間にありて衆生を利益にも入り、ついに、佛身と合一する時節ありと、今、上記の文中でも、尊者は佛教の事理相即、因果應報、色心不二の故を基調として、諄々と菩薩なるもの、場が十善にあることを説かれるのである。佛教は無我縁

起を説くが故に一切諸法の本体を認めない。佛教以前の婆羅門教のウパニシャドに於ては宇宙の本体に梵我を認め、それに合一することを理想とした。佛教は本体我を認めず、如何にあるべきかの如是相が問題となる。無我縁起が宇宙の真相であり、法性であるが故に、これが眞実の如是相である。この法性のまゝに進動して行くことが佛教の理想であつて、宇宙の本体に入ることではない。即ち理に合一することなく、事に現はして行くことである。他の言葉を以て云へば、有の世界より空の世界に入り、有の世界と空の世界との相即不離なることを悟り、空の正見を以て有の世界を改造しゆくところに涅槃ありとするのである。淨土教で申さば、日々の念佛によりて佛の護念を受け、現実の生活を改善し、未來は極樂に往生して、還相回向により限りなく衆生済度に進むことである。今、慈雲尊者が十善を細説せらるゝことも、要は佛性の開發、法性の具現に外ならない。

佛教の研究が、各種の部門に分れて盛んに行はれゆくことは誠に結構であるが、單に知識上の問題に偏せず、教家として、慈雲尊者の十善法語の如きを味読し、體驗して、煩惱具足の身にむちうち、社会を淨化することに心がけ、修養してゆかねばならないと思う。

(前引、人となる道略語の難解の点は慈雲尊者全集 卷十三参照)